

《評論連載》



子ども読者は何を受容するか (下)

長谷川潮



四 児童版六五冊の『平家物語』

日本の古典がどのように児童書化されてきたかということについて、わたしは「児童における古典文学の受容」と題した論文を書いたことがあり、それは水原一編『古文学の流域』（新典社、一九九六）に収録された。わたしの高校時代の恩師である水原一（はじめ）は、定時制で教えるかたわら駒沢大学の大学院で学び、のちに駒沢大学の教授となった。『平家物語』の研究で知られた学者である。『古文学の流域』は、水原が大学を定年退職するに際しての記念論文集だが、わたしに書かせることで、水原は高校教師時代を回顧するつもりだったようだ。

専門家が寄稿する論文集に、素人が感想文などを載せても始まらないだろう、自分の領域で書くしかないと思い、『平家物語』がどう再話されてきたかということを通じてみた。対象としてリストアップしたのは、奥野庄太郎『児

童源平盛衰記』（一九二二）から高野正巳『平家物語』（一九四九）までの六五冊である。（古くは『源平盛衰記』は独自のものとして扱われていたが、現在では『平家物語』の異本の一つとされている。）

この六五冊でその時点までの児童書版をおおむね網羅しているはずで、一九二一年から九四年までの七三年間で六五冊だから、毎年ほぼ一冊刊行されていることになる。それだけ多数のものが子ども読者に提供されてきたのである。わたしはこの六五冊を四期に分けて概観してみた。

五 一九九〇年代以後の作品選択

最近において日本のどういいう古典が児童書化されているかということの一例を、前号で書名を挙げた一九九〇年代刊行の『少年少女古典文学館』（講談社）に見てみよう。（一）内は執筆者である。